



# カタバミ (酢漿草、酸漿草)



学校法人中部大学 監事 太田明徳



カタバミ科カタバミ属、*Oxalis corniculata*. 和名(傍食、かたはみ)は4枚あるべき小葉が1枚不足と見えるからと図鑑にあるが本当だろうか。地域によってさまざまな呼び名があるらしい。温帯の多年草で日本全土に広く分布する。高さ10-30cm、葉は3個のハート型の小葉からなる複葉で、睡眠運動をする。黄色の五弁の花をつけるが、やや日陰を好み、道路脇などどこにでも生える。芝生にも侵入して匍匐枝を伸ばして繁殖する。ヤマトシジミ蝶の食草である。

葉が赤紫色のものをアカカタバミというらしく、それも含めてごくありふれた雑草である。

左の写真は51号館南の道路沿いの空きスペースに生えていた8年前のものであるが、砂利が敷かれて消滅した。ぞんざいに扱われている草なのに、花言葉は「喜び」、「輝く心」、「母の優しさ」などと高評価である。知る人ぞ知る、のだろう。

葉や茎にシュウ酸(蓚酸)を含んで酸味がある。属名のOxalisはギリシャ語の「酸っぱいoxys」が語源。シュウ酸はカタバミから発見されたのでoxalic acidと言う。タデ科のイタドリやギシギシ(蓚)、スイバもこの酸を多く含む。ホウレンソウやタケノコなどにも含まれる。カルボキシル基2個の簡明な構造の有機酸で、「劇物」に指定されている。カルシウムイオンと強く結合するため、血液凝固を阻害し、結石を生ずることもあるらしい。

カタバミの葉をデザイン化した酢漿紋は鎌倉時代からあり、10大家紋の一つという。匍匐枝ゆえに一族の堅い結びつきと繁栄を象徴するらしい。徳川家の葵紋も同様で、昔の人は花よりも逞しい繁殖力に肖ろうとしたのだろう。

同属のムラサキカタバミ(写真右)は南アメリカ原産で、薄い紅紫色の花も葉も、カタバミに比べると大ぶりである。観賞用として輸入され、野生化した。中部大学では1号館と2号館の間、生垣の下に植えられていて、季節になると咲くが、気づく人は少ない。

で、駄句二つ。

敵うなしと微笑う庭のカタバミ

カタバミも夢まどろむか葉を閉じる

参考)

- ・「花と樹の大事典」、木村洋二郎編、柏書房1996
- ・Wikipedia、「カタバミ」
- ・山溪カラー名鑑「日本の野草」、林弥栄編、山と溪谷社1983